

## クリスチャン・ディオールデザイン画 (Ⅱ)

### —1950年の創作背景の一考察—

Christian Dior's design (Ⅱ)

—a study of creation background in 1950—

宮澤俊恵・畑久美子

Toshie MIYAZAWA and Kumiko HATA

#### 1. はじめに

クリスチャン・ディオール (1905—1957) は、デビューの1947年春夏コレクションにおいて、「コロール・ライン」を発表した。その優しい肩、ふくらみを持った胸、草の茎のように細いウエストで、花のようにひろがったスカートというシルエットは、大戦後間もないファッション界に衝撃をもたらした。その後、ディオールが発表するラインは常に注目され、急死する1957年までの10年間、シーズンごとに新たなラインを発表したことにより、女性のファッションに大きな影響を与えた。また、その影響は当時のファッションだけにとどまらず、現在にも受継がれていると言える。例えば、1955年春夏

で発表された「Aライン」(図1)はスカート、コート、スーツともラインを三角形に広げ、ウエストラインはバストのすぐ下か、ヒップの位置とした。それは、まるでアルファベットのAの字のようであることからその名がついた。その後「Aライン」は三角形のスカートやドレスを示す、一般的なファッション用語となっている。このように、ディオールといえば「ライン」に注目が集まり、それについて語られることがほとんどである。

前報<sup>1)</sup>では、1950年にクリスチャン・ディオールのデザイン画77点(図2)を資料とし、クリスチャン・ディオールの略歴、文献よりディオールのデザインについてとらえた上で、資料の概要、描かれている衣服、使用されている色



図1 1955年発表「Aライン」出典：参考文献<sup>7)</sup>

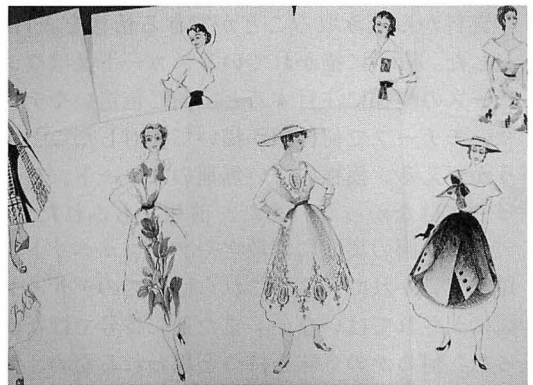


図2 資料のクリスチャン・ディオールのデザイン画の一部

彩について報告した。そこでは、①資料に描かれた衣服は全て、ディオールのデビューを飾り、ニュー・ルックと呼ばれた1947年の「コロール・ライン」のシルエットであり、1950年のコレクションにおいて新たに発表されたシルエットとは異なるということ、②スカート以外の部分は着色されていないデザイン画が多数あるが、スカートについては全てが丁寧に着色されていることから、スカートの模様と色の検討のためのデザイン画であろうということ、③デザイン画の表現技術にばらつきがみられるため、ディオール本人が描いたものであると確定するのは難しいということが明らかとなった。これに引き続き本稿では、これまであまり語られる機会が少なかったテキスタイルの模様に着目し、資料の概要をより明らかにするとともに、ディアールの1950年の創作背景について考察を試みた。

## 目的と方法

前報に引き続き 1950年にクリスチャン・ディアールのデザイン画77点を資料とし、テキスタイルのデザインなど資料から読み取ることができる情報を分類・整理する。それをディアールの著書などの文献の記述と照らし合わせながら当時の創作背景について考察する。

## 2. テキスタイルの模様を用いられているモチーフによる分類

資料から読み取ることができる情報を表1に記した。資料に描かれているスカート又はワンピースの模様に注目すると、同じ色遣いやテーマ、モチーフで何種類か描いて検討したことがうかがえる。模様のない無地のスカート、ワンピースはなかった。また、前報でもふれたが、デザイン画の裏面には数字やアルファベットが鉛筆で書かれている。これらは全てのデザイン画に記されているわけではない。また通し番号ではなかった。何らかの意味を持つと思われるため、情報の一つとして併せて表に記した。

表1 デザイン画から読み取った情報

	表紙	テキスタイルのモチーフ	デザイン画の裏面に記されている文字			
			アルファベット	アルファベットと数字	数字	その他
1	Eté	海中生物	B		109	
2	Eté	海中生物	B		106	Eté
3	Eté	幾何学	B			
4	Eté	類似なし	B		64	
5	Eté	船・セイル、ロープ	B		98	
6	Eté	幾何学	B		100	
7	Eté	天体	B			
8	Eté	類似なし	D	F1	63	
9	Eté	類似なし	B		6	
10	Eté	細線	B	F5/253		
11	Eté	縦縞	D			
12	Eté	類似なし	B		8	
13	Eté	幾何学	B		61	
14	Eté	四角	B		45	
15	Eté	類似なし	B		21	
16	Eté	幾何学	B		3	
17	Eté	類似なし	D	B1/512		
18	Eté-Plage	類似なし	C		73	
19	Eté-Plage	リボン	C		71	
20	Eté-Plage	リボン	C		74	
21	Eté-Plage	花・モザイク	C		91	
22	Eté-Plage	花・中央	C			
23	Eté-Plage	花・中央	C		99	
24	Eté-Plage	リボン	C			
25	Eté-Plage	花・中央	C		96	
26	Eté-Plage	花・中央	C		95	
27	Eté-Plage	リボン	C	Bio-97	97	
28	Eté-Plage	花・中央	C		102	
29	Eté-Plage	天体	C		34	
30	Eté-Plage	天体	C		29	
31	Eté-Plage	天体	C	F7/253		
32	Eté-Plage	類似なし	C	F9	253	
33	Eté-Plage	ピアノ	C			
34	Eté-Plage	花・中央	C			
35	Eté-Plage	花・中央	C			
36	Eté-Plage	花・モザイク	C			
37	Eté-Plage	花・伝統柄風	C			
38	Eté-Plage	花・伝統柄風	C			
39	Eté-Plage	花・伝統柄風	C			
40	Eté-Plage	花・伝統柄風	C			
41	Eté-Plage	花・伝統柄風	C			
42	Eté-Plage	花・伝統柄風	C			
43	Automne	縦縞	B		161	
44	Automne	ピアノ	B			
45	Automne	細線	B	F12/73		
46	Automne	類似なし	B	F18	263	
47	Automne	類似なし	B		26	
48	Automne	縦縞	D	811(?)		
49	Automne	類似なし	D		59	
50	Automne	曲線2色	D			
51	Automne	四角	B		52	
52	Automne	四角	B		50	
53	Automne	四角	B		46	
54	Automne	類似なし	B			
55	Automne	リボン	D			
56	Automne	リボン	B		115	
57	Automne	類似なし	B		88	
58	—	リゾート	A			
59	—	リゾート	A			
60	—	リゾート	A			
61	—	リゾート	A		11	
62	—	幾何学	A		15	
63	—	細線	A			
64	—	船・セイル、ロープ			30	
65	—	船・セイル、ロープ			30	
66	—	天体	A			
67	—	曲線2色	D			
68	—	類似なし	D			
69	—	花・モザイク	D		53	
70	—	船・セイル、ロープ	A		84	SPECIMEN
71	—	リボン				
72	—	海中生物	A			
73	—	花・中央	A		107	
74	—	花・伝統柄風	A			
75	—	花・伝統柄風	A			
76	—	類似なし	A		103	
77	—	類似なし	A			

表2 モチーフの分類結果と資料数

モチーフ	点数
花・中央	8
花・伝統柄風	8
花・モザイク	3
天体	5
船・セイル、ロープ	4
リゾート	4
海中生物	3
幾何学	5
四角	4
細線	3
縦縞	3
曲線2色	2
リボン	7
ピアノ	2
類似なし	16
合計	77 (点)

表3 モチーフと表紙の資料数

モチーフ	表紙			
	Eté	Eté-Plage	Automne	無記入
花・中央	0	7	0	1
花・伝統柄風	0	6	0	2
花・モザイク	0	2	0	1
天体	1	3	0	1
船・セイル、ロープ	1	0	0	3
リゾート	0	0	0	4
海中生物	2	0	0	1
幾何学	4	0	0	1
四角	1	0	3	0
細線	1	0	1	1
縦縞	1	0	2	0
曲線2色	0	0	1	1
リボン	0	4	2	1
ピアノ	0	1	1	0
類似なし	6	2	5	3 (点)

表1からモチーフの分類に注目し、点数の内訳を表2に記した。模様は14種類に分類することができた。草花を用いたものが3種類（計19点）、海中生物や船など海に関するものが4種類（計16点）、細い線や四角形などシンメトリー等を用いて配置した幾何学的なものが5種（計17点）、そしてピアノ（計2点）、リボン（計6点）と分類をした。しかし、他と類似性がみられないものが16点あった。

分類結果を詳細にみると、最も多いモチーフは花を中央に配した8点と、花や草を用いた伝統柄風の8点であった。次いでリボンを様々な展開したグループが7点、幾何学模様のグループが5点、星・月・太陽を主に用いた天体が5点と続く。

モチーフによる分類結果を前報<sup>1)</sup>で報告したシーズンを表していると考えられる“Eté”（夏），“Eté-Plage”（夏の浜辺），“Automne”（秋）、無記入の4群の表紙による分類と照らし合わせてみると（表3）、必ずしも同じモチーフが同じ表紙（シーズン）の分類において用いられているのではないことが分かった。例えば、天体をモチーフにした5点をみると、Etéが1点、Eté-Plageが3点、無記入が1点である。しかし、リゾートをモチーフにした4点のよう

に、全てが同じ、無記入に属しているものもあった。これらの結果から、シーズン特有のモチーフとシーズンを越えて用いられるモチーフがあることが推測される。

### 3. テキスタイルの模様について

それでは、どのような模様が検討されていたのか、いくつかのモチーフを例に詳細を述べる。

リゾートと分類した4点のモチーフは、いずれも海に面した地域を緻密に、また、ユーモアをもって描いている。ヨーロッパのリゾート地として知られているバスク地方のバイヨンヌ、アンダイエ、モーレオン、サン・ジャン・ド・リュズの紋章を描いたもの（図3）、ブルターニュ地方のプレスト、カンペール、白い帽子が特徴の民族衣装を着たカップルも描かれている（図4）。また、地中海に面したカンヌ、ニース、マルセイユなどを建造物や特産品を交えて描いたもの（図5）、スペインのパレアス諸島もマヨルカ、ミノルカ、イビサ、フォルマンテラと詳細に描かれている（図6）。描かれている地域や内容から、夏のバカンスなどで着用されることを想定してデザインされたシリーズではないかと考えられる。

次に、リボンと分類した7点は、リボンとい

う同じモチーフを用いながらその表現方法は様々で、蝶結びにしたリボンを曲線と共に配したものや(図7)、リボンのドレープを表現したものなどがみられる(図8)。配色は、白+黒や白+黒+ブルーなど落ち着いた色が選択されているため、リボンという装飾的なイメージを持つモチーフでありながら、全体的にすっきりとしたディオールらしいフェミニンな印象を与えている。

続いて天体と分類した5点であるが、太陽と波を描いたものからは(図9)、夏の浜辺をイメージさせる。また、星と流れ星や(図10)、

太陽、月、星を配したものがある(図11)。ディオールはメゾン設立以前、マルセル・ブサックに会いに行く途中、馬車の車輪の部品の一部である星型の金属片につまずいた。それを好運のサインとしてポケットに入れ、ブサックにメゾン設立について語りチャンスを得たことから、ディオールは星を好運のモチーフとしていた。星型のモチーフは現在のDiorにおいても、メゾンの上に星型のオブジェが設置されているなど(図12)、象徴的に用いられている。

資料を注意深く観察していると、筆遣いが感じられるほど丁寧に描かれていることに気がつ



図3 リゾート バスク地方の紋章



図4 リゾート プルターニュ地方



図5 リゾート 地中海



図6 リゾート パレアス諸島



図7 リボン 蝶結び



図8 リボン ドレープ



図9 天体 太陽と波



図10 天体 星と流れ星



図11 天体 太陽と月と星

き、また見る者に様々な想像を与える。ディオールは制作に対して自伝の中でこう述べている。「デザイナーはモチーフによって仕事をするのではなく、寧ろ仕事は詩的表現に近いものである。或る種の郷愁が必要である。」<sup>2)</sup> このことから、テキスタイルの模様にもデザイナー自身の思い出や思い入れのある情景を取り入れていたのではないかと考えられる。また、雑誌『ヴォーグ』は「ディオールのプリントは、いつもとても美しいので、着手は並はずれた美人でないと目立たないでしょう」<sup>3)</sup> と評しているが、それはこのデザイン画に描かれている模様についてもあてはまるのではないだろうか。

#### 4. テキスタイルの模様をデザインする過程について

テキスタイルの模様をデザインするのは、制作のどの段階で行われていたのだろうか。ディオールが制作過程について述べている一文に、「私に見せられた布がどんなに変化に富み、又美しくても、目新しくても、それが出発点とはならない。コレクションの最後にシルエットが十分決められた時、布の模様とか、色又は材質によって直接体にまきつけるのであるが、これは基礎となるシルエットが決まってからするのである。」<sup>4)</sup> とあり、この点から、ディオールは

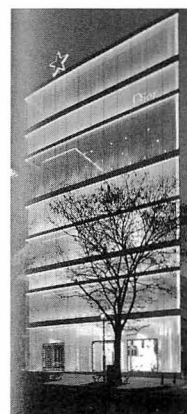


図12 ディオール表参道店  
出典：参考文献<sup>8)</sup>

まずはシルエットを決定し、それに合う模様や色を決定していたことが分かる。

そして、資料のデザイン画においてシルエットは共通しており、また、ワンピースは襟や袖などの違いにより9パターンあるものの、スカートについてはトップスに襟や袖の形の違いがあるが、スカート自体は全て同じ形であることから、シルエットはこの時点で既に決定していたと考えられる。そのため、この資料のデザイン画もディオールの語っていた通り、シルエットが決定された後に模様や色を検討するために描かれたデザイン画であろう。

## 5. プレタ・ポルテのディオール

パリでは偉大なクチュリエであるディオールは、ニューヨークでは贅沢なプレタ・ポルテのデザイナーであり、既製服製造業者であった<sup>5)</sup>。1948年、ニューヨークにディオール社を設立したディオールは、1年に2回、スタッフを伴ってニューヨークへ行き、その場でコレクションをデッサンした。そして、そのコレクションの作品は、アメリカの高級百貨店やいくつかのファッション・ブティックで販売された。サイズはフランス女性より大柄の女性向けに考えられ、フランスと異なる気候に合わせて作られた。それらの服の大部分は、ディオールのアトリエで作られ、残りが厳選されたアメリカ製であった。製造に関して、ディオールが選定した布地の使用と、二者択一をすることになった場合にはディオールの承認を求めることによって「ディオール」の品質を完全に保ち、服のコピーについて厳しいチェック体制を確保したという。また、ニューヨークではペプラム付きのテーラード・スーツがベスト・セラーとなり、その破格の売れ行きは8シーズンも続いたとあり<sup>6)</sup>、人気の高いシルエットは発表したシーズンだけではなく、何シーズンにも渡って販売されていたとがわかる。資料のデザイン画も1950年のデザインながらコロール・ラインの典型であることから、それと同様の類ではないかとも考えられるだろう。

## 6. まとめ

1950年のクリスチャン・ディオールのデザイン画について、テキスタイルの模様を中心に調査し制作背景を捉えた。

まず、テキスタイルの模様に用いられているモチーフによる分類を行い、制作段階においてどのようなモチーフが検討されていたかを明らかにした。また、モチーフはシーズン特有のも

のと、シーズンを越えて使われているものがあることも分かった。次に、模様を詳しく調査することにより、当時のディオールが世の中に提案したかったファッションの一片をみることができた。そして、制作の工程の中で、模様を検討・決定するのはどの段階で行うかを調査することで資料のデザイン画が持つ役割を確認した。また、このデザイン画が描かれたのは前報で記した通り、1950年の前年の冬、つまり1949年であると考えられるが、今から約60年前のファッション業界における制作過程を垣間見ることができるのは、このデザイン画の新たな役割となっているのではないだろうか。

## 参考・引用文献

- 1) 畑久美子, 宮澤俊恵: 共立女子大学家政学部紀要, 56, 23-32 (2010)
- 2) クリスチャン・ディオール著, 上田安子, 穴山昂子訳: 「新版 一流デザイナーになるまで」, 牧歌社, 2008, p.86
- 3) ブリジット・キーナン著, 金子桂子訳: 「クリスチャン・ディオール 1947-1950」, 文化出版局, 1983, p.106
- 4) 2) に同じp.98
- 5) マリー＝フランス・ボシュナ著, 高橋陽一訳: 「クリスチャン・ディオール」, 講談社 1997, p.307
- 6) 5) に同じ
- 7) 3) に同じp.134
- 8) 「WWD FOR JAPAN 2004 SPRING & SUMMER」エム・メディアグループ, 2004, p.81
- 9) エリー・ラブルーダン, アリス・シャヴァンヌ編, 朝吹登水子訳: 藝術新潮「クリスチャン・ディオール対談 モードはいかにして生れるか」, 4-10, p.230-237 (1953)